

特定非営利活動法人

おかやま人権研究センター・ニュース

発行 センター事務局 2012. 6. 10 第19号

読者会、熱い討論の輪広がる

ミニコミ誌の使命明らかに

5月27日(日)1時30分から、岡山民主会館で、「読者会」が開かれました。「読者」とは、「人権21」の読者のことで、「人権21」に掲載された論文について感想を述べあい「人権21」の内容をレベルアップさせようという趣旨の会です。

今回は、あらかじめシンポジストに「若者論」「脱原発」「その他」と大きくテーマを振り分けて発言をお願いしていました。報告者からは、それぞれ現在の生々しい若者状況(正保宏文氏)や、自治労組合の書記としての日常(内田みどり氏)や、大震災後の現地ボランティア参加経験談(田中金一氏)などが報告されました。

会場からは、正保報告に関連して、若者が語る夢が「ささやか」であることについては、必ずしも悪いことではないのではないかという発言があり、静かな共感を呼んでいました。

脱原発に関連して、会場からは、日頃の教育が重要であり、原爆の悲惨な写真を見た子どもは、脱原発意識が強いこと、思春期の子どもには刺激が強すぎるとして、これを見させないような風潮があったが、教師は自分からひかないで真実を子どもたちに伝える必要があるとの発言がありました。

現地ボランティア参加体験報告が、原発の真実が明らかにされていない、とくにマスコミの報道が真実を曲げているという報

告に関連して、会場から、マスコミだけではない、例えば国家公務員試験などでも、マルクス経済学関係の問題は、ある時期から出されなくなったという発言がありました。

こうした討論の中から、「人権21」という小冊子の果たすべき役割も、自ずからはっきりしてきたように思われます。脱原発問題で明らかなように、多くのマスコミ紙は、その利害関係やら政財界での役割などからして、国民の前に明らかにすべきことを隠したりゆがめたりする可能性が大きい、それに対して私たちの雑誌は、自由に真実を追究できるはずだ、それをめざして誌面作りに励もうという目標が非常にはっきりしてきたように思われます。

今年読者会は、こうして、ささやかながら1つの成果を上げて静かに幕を閉じました。

なお、読者会終了後、NPO法人おかやま人権研究センターの総会が開かれ活動方針ほか、決算予算、理事、役員名簿などが承認されました。

教育研究会 4月14日

小出隆司さんが、先回に引き続いて、作る会系教科書の問題点と、採択率増加の背景について報告されました。とくに八重山地区採択過程を分析されました。